

日本G.A.P.ニューズレター

No. 6-7

目 次

バビロンの時代	G. アダムスキ	1
質疑応答	C. A. ハニー	3
《宇宙哲学》	G. アダムスキ	7
宇宙哲学の定義		7
真理とは何か		7
弛 緩		9
宇宙の言語		11
化学的な宇宙		13
古代の知恵か現代の進歩か		14
過去の文明		17
練習法		20
“宇宙哲学”の読み方	C. A. ハニー	20

# バビロンの時代

ジョージ・アダムスキ

かつて私のところにいた助手が現在いませんので、手紙類が山積して  
います。それで私はこのニエース・レター(註。ハニー氏のニエース・  
レターを通じて多くの質問に答えることにします。

私はサイレンス・グループを恐れてはいないということをはっきり申  
しておきましょう。恐れているとすればこんな記事を書きません。  
私はブラザーズが来た本来の目的のために活動していますので、私がサ  
イレンス・グループの主な目標になっていることを知っています。私は  
右の目的を宗教、考古学、その他ブラザーズの真目的について大衆を混  
乱させるような分野と混せることはしないつもりです。

この真目的を他の諸目的と混せる人は、混乱を望んでいるサイレンス  
・グループに自身を貸しているのです。遺憾ながら私の最も親しい友人  
連のなかには故意にかましたは知らぬいでこんなふうにも自身を利用されて  
いる人がいます。その結果、私たちの活動は少なくとも一年間阻まれて  
きました。

私はサイレンス・グループの行動についてこれまで何も言いません  
でした。それはワナにかかっている私の友人たちの誰かを傷つけること  
になるからです。しかしすでに完成した善良な人々を救うために、この  
ことはいつか必要になるかもしれません。実際にはサイレンス・グルー  
プのために役立っているのに、自分が正義のために働いているのだと信  
じておこなっている人々もありません。サイレンス・グループはこの種の欺  
瞞と宣伝の達人です。私は世界旅行でこうした人々に個人的に接したの

で、知っているのです。彼らは同好の研究者たちの間に信念や混乱を起  
こそうとしています。彼らは団結に力を存することを切っています。  
すので、国家間と同様に同胞の間でも分裂を起こそうとするわけです。  
政府でさえもこの型の悪徳におちいりやすいのです。サイレンス・グル  
ープは致命傷を与えんものと常に打ってかかるでしょうが、私は地上で  
生きるのにただ一つの命しかないことを別段恐れはしません。

グレン中佐の人間衛星について、多くの人がグレンの見た物(複数)  
について質問しています。これらの物々がカプセルの側面に衝突する  
のを防いだのは一体何でしょう。あのカプセルは疑似真空の中を飛んで  
いました。というのはあのスピードで空間を飛ぶ物はその周囲にそれ自  
体の空気を生み出すのです。これはいわゆる空気のない空間でさえも  
起ります。するとカプセルの本体とその周囲の気層の間に真空状態が  
自動的に生み出されます。これが一種の保護層またはフォース・フィ  
ールドとして作用し、飛んで来る小物体がカプセルに衝突するのを防  
ぐわけです。

グレンが自撃したより大きな物体(註。複数。蛍の光のようであった  
といわれるもの)は、或る宇宙母船から発射された調査用小型円盤群で  
遠隔操作によって飛ばされていきました。この円盤群はグレンの飛行より  
の詳細を監視していたのです。もしエ合のわるい事が起ってグレンの  
生命が危機に瀕するようになったとすれば、ブラザーたちは彼を救った  
ことでしよう。グレンはあまりに速く飛ぶ、そして叱しかったために周  
圍で発生している事柄を多く観察することはできませんでした。たとえ  
彼が円盤だということを知ったとしてもそれについて口外することは許  
されぬでしょう。彼が未だに軍務に服して、軍の秘密取締下にあ  
ることを忘れてはいけません。

私はここで一つの事柄を確言しよう。すなわち、地球の大気圏外のすぐ外側には絶えず多数の宇宙船がいて、地球人が企てることを注視しているという事実です。もし不慮の事故が起こったとしても地球人を救出することは必ずしも不可能ではないでしょう。彼らブラザーズはわれわれの玩具からかなり遠方に留まる必要がありません。というわけは、彼らの宇宙船は地球のロケット類と異なり、推進装置などに影響を及ぼすことにはなるかもしれないからです。彼らの宇宙船と地球のロケット類とはあたかも象とハエをくらべるようなものです。グレンだけだ二人が大気圏外にいたのではありません。グレンのあとに続く人も同様です。たとえ、パイロットが親しく同乗できるほどの距離に大母船群が接近できなにしても、パイロットは調査用小型田舎を見る者です。最近の諸遊覧の集合はこれまでの異常な状態に關係があったのではないかと多くの人が質問しています。そうです、たしかに關係がありましたが、そして更に多くの關係が起るでしょう。これらの氣候の変化は自然の周期の一部になり、地球はその方向へ移ってゆきつづつあります。この時期の間人類は不安になり、個人的に抑制しなければ自身を傷つけることになるかもしれません。これからの八年間に多くの不愉快な物事が起るでしょう。それゆえ人間はそれに影響を受けまいようにして、素晴らしい理解力を持つ必要があります。

われわれは現在、バビロンクの時代に生きていこうと言います。そこでは人間の自我がそれ自身を高めて躍進するだけです。(註。バビロンは紀元前二、二二五五頃にアジア南西部に栄えた悪徳の都として有名)しかし宇宙の英知は永遠に働き続けるでしょう。イエスが言ったように、実を結ばない木は火の中に投げ入れて燃やされるべしです。そうです。今人間の魂がその真節を試し、試されている時代です。宇宙の英

知かそれとも人間の自我のいずれかにたいする自節です。遺憾ながら右の時代が過ぎ去るまには殆どの人は火に燃やされるでしょう。

人間の心は実にいい加減なもので、多くの物事にたいする豊富な知識に欠けていますので、多くの面で大まかれます。ときとして人間の心は至上なる英知を否定する傾向を持ち、心自体の落着いた狂暴性を起します。それは自己探検に至るほど、宇宙の英知に挑戦することになるでしょう。もし人間の心が試されつつあるということになれば、今こそその時です。

私が予定されている旅から帰れば以上のことについて、また未来が人類に何を約束しているかなどについてもっと詳細を知るようになると思います。私は一つの事を確言できます。すなわち、私は自分の快樂のために宇宙計画を、ブラザーズを決して裏切ることにはしないと申す。永遠という長このなかでは地上の生活は一瞬間にすぎません。

はるかなる未来の日に 人類は立ちどまって  
はるかなる過去をふり返って見つめ、たどりまた道を探して、  
むかしのコロンブスのようにただ独りで立って来た人を見出す  
たろう。

人類の運命が展開するにつれて、上空の壁を指さしながら、  
嘲笑をものともせず、支持する人が殆どないままに、ただ  
独りで立っていた人――

(註。これはアダムス氏の七十才の誕生日を記念してハニ氏がアダムス氏に捧げた詩の一部分の大意です。編者)

質疑 応答

(註) 二これはゴズミック・サイエンス・ニミューズレーターに掲載された「疑問と回答」の訳で、回答はハニー氏によります。

(問二) 尚来記に私は非常な興味を持ちましたが、しかし科学的な事柄だけを扱う或る研究団体の長として、私はあなた側のコンタクトについての何かの証拠を提示していただければ幸いです。(エタ州の「科学研究会」長 J. C.)

(答) 右の質問は私が寄越されました。この人はおそらく何かのクラブを始めたばかりのジョン・エイジャーだと思います。私は次のような回答を送りましたが、これは証拠物件について同じような質問を寄越された人々にとって興味あるものでしょう。

「私たちがあなたの要求される証拠を提示する前に、私たちは次の二つの事を知る必要があります。① アダムスキのコンタクトについての十分な証拠物件としてあなたは何かよいと思えますか。② あなたが科学的な事柄だけを扱うか、というからには、あなたの言われる「科学的事実」という言葉の意味を説明して下さいませんか。今日の「科学的事実」は昨日はされた理論になるといふことがこれまでの私の体験でした。言うまでもなく、必ずしも決まらねた。この人は一体どんな種類の証拠物件を求めているのだろうか、と私はいつも奇妙に思っています。これまでに示された豊富な証拠の何たるかを見抜くことができなるとすれば、それ以上に何か欲しいというのでしょう。

アダムスキ氏は、過去十年間に専門家達による精査に堪えてきた写真類を提示しています。また彼は、金属のドームであることがハッキリと

わかる宇宙城のカラー映画も撮っていますし、最初の砂漠の会見について宣誓書に署名した証人たちもいます。またロケットや人工衛星類が発見した無数の新事実が、科学者がそれを発見するに以前にアダムスキ氏の著書類に述べてあります。これ以上に何の証拠物件を必要とするでしょう。眼前にある事実が見えぬほどにわれわれは愚かしいということになるのでしょうか。

(問三) 私たちが教会で聞く話は私たちが満足させるものではなく、信仰ということには全く制限されているように思われるのはなぜでしょうか。牧師たちは口盤問題を嘲笑し茶化したります。何故も私に家に帰るほうがよいと思いましたが、しかし精神的に生長するのに何かの助けになるかもしれないと思ひながら教会へ通ひ続けられます。(オハイオ州、W. P. ウォーレン夫人)

(答) 口盤の区別、中の「聖書と UFO の章の一〇四頁まで読み下さい。宗教問題は取扱りにくい問題で、私が次のように言うのは別に特定の宗派や団体をも攻撃するわけではありません。

私の意見では、教会が満足させないのはその教えの九〇パーセントが人間の教義であって神(宇宙の法則)の教義でないからです。殆どの教会がガイドとして聖書を用いよと言っています。しかし実際にはどれだけの人が聖書に依つていてでしょうか。いとしてもほんの僅かです。大抵の人が自分の特殊な信念に合致する部分だけを取り上げて、あとを無視しています。もし教会が聖書を靈感によって書かれたものと認めるならば、教会は聖書からの訂正を受け入れるべきです。たとえば聖書は言っています。「他人からしてもらいと思ふことを他人にもせよ」と。どれだけの人がこれを行なっているでしょうか。

なぜ教会は満足させてくれないのでしょうか。教会は言います。「あな

たが正しく生きようならば（教会自身の正しさを概念に基づいて）死ぬるときに天国へ行ける」とし、聖書にはこんなことは書いてありません。また、神聖の教義が引き延ばると言う教会もありませんが、こんな教義は聖書の中に述べてはおりません。人々は筋道の通った事と事実とを望んでいます。それと論議が示されるべきはそれらは少なくとも論理的であるべきです。

真実の聖書研究者たる牧師たちは凶器問題を嘲笑しません。凶器は聖書の中心何處も述べてあるからです。また凶器は時代の終りに関する事言の主役にもなっています。そしてその言は実現するでしょう。

人間との創造者についての理解力を人間にもたらす責任は教会がとつてきているからには、ブラザーズ来訪の事実とそれにまつわる真相とを説明するのは教会の義務であるように思われます。そうすれば一般人の側における敵意に満ちた態度のかわりに尊敬を得ることにようになります。

もし教会がこの事実を世間に説明しないならば、地上で人類に何が起ころうともそれにたいして教会は責任を要するはならぬことになりまます。われわれは最後の岐路に立っています。二つの方の内で一つが迎えるかも知れません。ブラザーズの援助によってわれわれは高度に進化するようになり得て、この世界にかつてなかったほどの文明を永続させ得るのです。世界の人々が一体化するために永続するか、それとも核競争で互を完全に絶滅させることもできます。

かくて、ブラザーズの真実に関する真相の声明の必要性は一般人が気づいているよりもはるかに重大です。世界の人々が實際に危なくなっている事柄を理解するために、受容的な人々を広くこの問題が知られることが必要です。

聖書に書かれている予言はどうかして実現するでしょう。この地上

に天国が確立されるか、それとも地球人類の完全な絶滅が起るか、そのいずれかが避け得られない結果となるでしょう。その選択は人間自身にあります。レカレー——主な責任は世界中の精神的指導者の肩にかかっています。

〔問三〕 以前の質疑応答であつたは次のように言っておられます。「生命の期間が長いにもかかわりず、彼ら（宇宙人）はわれわれと同様に死と生まれかわりを体験する」。地球人は一体どんな生まれかわりを体験することになつていのですか。（カイ・J・シル）

〔答〕 われわれは自分か人格の突で発達している程度にしたがつてこの地球かまたは高い進化をとげた遊星に肉體を持つて生まれかわります。聖書にはこのことを「復活」すなわち「生き返り」と述べてありますが、元の意味とは遙かに曲げられています。

〔問四〕 或る女流の精神療法家最近アダムスキのことに關して尋ねたところ彼女は次のように答へました。「おお、彼はアルコール中毒の患者です。私は彼のことは全然話さずにいづも、デズモンド・レズリーのことだけを話します」。私はショックを受きました。これは一体どうしをわけでしょう。（ワシントン州スホウケアン、E・M夫人）

〔答〕 アダムスキ氏はアルコール中毒者ではありません。これまでにかつたことありません。レカレー・エズでさえもときとしてブドー酒を飲みましたし、すべての事に適度であれとだけ言っています。これは飲酒と同様に食事にあつてはなりません。アダムスキ氏はコングラト・グループの指導者を指しますので攻撃されています。レカレーは真実の心霊研究者にたいして決して対抗はしません。詐欺師だけが彼を恐れるべき理由を持つていのです。

もっと有名な凶器研究者や講演家の中には故意にかまはれ知らずにサ

イレニス・グループを援助しているのがいます。一方で宇宙機に関する真相を明るみに出そうと努力しているように見えながら、アダムスキ氏を先聲せしめようとして実質裏面に及して活動しているのです。この人々はまじめな人たちなのだと思ひながら多くの新来者はたやすく騙されていきます。これは私の意見ですが、私の考えではコンタクトマンの中にはサイレンス・グループによって欺かれてゐる者がいるようです。こうしてサイレンス・グループは、コンタクトマンが騙されてゐるとは知らないのでその体験を語るように仕向け、この田舎町を至教者の高い人々がまじめに取り上げることを妨げるように作られた馬鹿らしい物語を振めてゐるわけです。

〔問五〕 マイアミにゐる一友人が次のように語ったことがあります。「アダムスキは駄目だ。いつか奴は車を運転してりて溝の中にはまり込んだ。それで車を捨てて歩き始めた。奴は次のように言った。『人間にたいする供給は無限だ。ブラザーが私に新しい車を見つけてくれるだろウ』」これはほんとうですか。(フロリダ州マイアミ、J・F・K)

〔答〕 人間というものは自分の手に負えない事や理解できない物事を疑ったり嘲笑しようとしてとやかく言いたがるものです。アダムスキ氏はこれまでに自分で車を運転したことはありませんし、運転免許証を取得したこともありません。説明しなくてもおわかりでしょうが、右のような話は完全な作り話です。われわれの計画に反対する人々は何らの調査もしないでこんな話に飛びついてそれを事実として流してしまふ。右の話は奇妙にもわれわれの計画に反対してゐる田舎研究雑誌に載つてゐるまじき虚偽の話です。アダムスキ氏をやつつけようというこゝとになれば確証や調査なしに載せられるのです。

5 〔問六〕 靈魂にどうして終滅ということがあるのですか。(ウァーシ

ニア州ロウアノウク、G・C)

〔答〕 人間は二つの魂を持つてゐます。一つは感官の心であつて、これは破壊され得るもので、肉体の死とともに滅びます。他の一つは肉体の内奥にある「英知」で、これは不滅であり、肉体は死んでも存続します。この魂は人間の心が考え得る限り始めも終わりもありません。

〔問七〕 われわれはどうすれば精神統一がやれますか。(右に全じ)

〔答〕 あなたが進化することを望み、テレパシーに熱心したければ、決して精神統一をやつてはいけません。これはあなたが求めているものを破壊するからです。熱心な精神統一はこの世で何かを達成するの唯一の方法だとわれわれは教えられてきましたが、實際には眞人としての向上とテレパシクな印象の感受は精神統一にかかつてゐるのではなく、関心と弛緩とにかかつてゐるのです。

いれゆる精神統一は肉体が固定してゐる状態で、一定の時にただ一つの想念だけを明白ならしめるのですが、関心は好奇心の状態で、それは周囲のあらゆる想念にたいして眞実の意識を開かしめることになりまふ。そしてこれは或る程度自由な状態でその想念群との非個人的な関係を生じさせます。

適當な関心の状態を保つためには弛緩というものを知る必要があります。これは一般で考えられてゐるような不活動の状態ではなく、激しい活動の状態です。それは自由な活動であるからです。一方、精神統一をやつてゐる間は疲労と緊張が急に起つてきます。正しい弛緩の状態の間は、肉体は甚だしく生々として、感じ、想念群は急速に心を通過します。かかる場合には實際には数分間が過ぎただけなのに数時間が過ぎたように感じられます。

非個人的な弛緩の状態があれば、人体はすべての振動にたいして感受的

になります。しかしその場合は一つの想念だけに關する精神統一をやめて自由にやらなければなりません。そして自我と感官の心は抑制されてゐる必要がありまゝ。するとテレパシーすなわち方物から来る印象の感受は可能になるのです。

〔問八〕 費下りがらくたニユーズレターを有難う。それを同封して送り返すから、こんな狂気じみた話を信じやうい誰か他のおめでたい人にまわしてくれ給え。われわれは、インチキをでっち上げたり各遊星を訪問したと称する者から何も聞きたくはない。だから費下のがらくた誌を決して送らないように頼む。コンタクトマンたちよ。真相ヒイカサマ師に氣をつけられたし。追伸。ジョーシ・アダムスキについて

はジム・モスレイからNICAAD(註。空中現象調査会。アダムスキ攻撃の一方の旗頭)宛にインチキであることが暴露されてゐる。——正直なU.F.O.研究会より。——(ニュージャーナル州ケンデル、ニユージャーナル空中現象研究会、エド・バブコック)

〔答〕 アダムスキ氏と私はこの手紙を見て大笑いしました。この人はわれわれの資料を読んだことさえない人のようです。アダムスキ氏は如何なる遊星をも訪問したとは公表していません。私がこの手紙に回答したとき、私はバブコック氏に、人工衛星類がこれまでに宇宙空間で発見した事柄についてアダムスキ氏がかつて述べていたという事實をあなたにどのように説明するかと尋ねて、最初の人工衛星が打ち上げられた時よりもだいぶ前にアダムスキ氏が発見した事柄の詳細を述べておきました。すると彼は「人工衛星類が打ち上げられることは誰も知ってゐる。広く喧伝されているからだ」と答えて来ました。この回答で彼が正直でもなければアダムスキ氏の著書ばかりでなく私の手紙をも読もうとしないことがわかります。これが彼のク正直な研究の一例であるとする

れば、彼に情報を頼っている人々を私は憐れむだけです。U.F.O.研究団体の長として彼は回盤研究界で一体何が行なわれているか、またこれまでに何を行なわれて来たかについて驚くべき無知を示しています。

モスレイとNICAADの両者はこれまでアダムスキ氏についていわゆる暴露記事を流れてきました。しかしいずれの場合も、この両者によつて流された記事内容と真相とは似ても似つかぬものでした。NICAADの情報というのには或る靈的な自称コンタクトマンから提供されるもので、この男はかつてアダムスキ氏が彼の虚偽性を洩らしたために、ひどくアダムスキ氏を憎む理由を持つていたのです。モスレイの場合は、彼は僞りの情報を利用して、他人から注意を避けてもそれを訂正しようとはしませんでした。たとえ彼はアダムスキ氏の回盤写真のD・P屋が死んだので、D氏の体験を確証することはできまいと言っていますか、これはウソです。そのD・P屋は今日まで元気に生きていて、私の所から六のマイル離れたケアリフォーニア州カールズバットに居んでいます。

〔問九〕 あなたは地球人も他の遊星の人間も生まれかわりを体験すると言つておられますが、これは誤りです。オアスペー、生命の書々を読んで下さい。

〔答〕 フラザーズによれば、肉体的な生まれかわりは高度に進化した遊星にもあるということです。忘れてならないのはニールブルト氏は軽い恍惚状態でおアスペーを書いたという事案で、これは氏自身も言っています。このトランス状態にある人間は多くのいかがわしい現象にかけりやすくなります。九分後に氏はその著書の内容を大部分書き改めました。この種の心電書にありかちなのは、多くの善き言葉がくだらない言葉と混ざつてゐることです。われわれは最新の知識に照らして書物の内容を判断する必要があります。

内容を判断する必要があります。

# 宇宙哲学

ジョージ・アダムスキ

## 宇宙哲学の定義

哲学とは知恵を愛することであると定義されてきた。それは生命の一哲學に應用されるような原理についての系統的な一般の概念であり、また心と物質の両面にわたるあらゆる現象の原因に関する知識である。宇宙哲學は、それ自身において完全な、整然と調和した一つの組織体と考えられる宇宙を包括するものである。

心と物質にたいするわれわれの現在の知覚力は、理解をして、不断の学習を行なう教室の中で自分の席をとるために、 $\infty$ の領域にまで拡張されねばならない。

觀察はわれわれの最上の教師だが、 $\infty$ をまたは万物が $\infty$ と関連した目的を見ることをわれわれは學ぶ必要がある。

象理すなわち本源なるものと自然の諸法則は永遠に同じまにある。それらは不変であるからだ。法則にたいする人間の概念は、宇宙に関する人間の目的を知ろうとすればするほど拡がってゆく。

この太陽系内の姉妹遊星群に住む隣人たちは、宇宙の最も微小な分子のすべては他のあらゆる分子と相互関係にあることをずっと昔知っていたのである。それに関して、生命の目的を得んの僅かでも知覚するためには、生命のあらゆる面が、全体と関連して研究されねばならない。彼らは興味ある人のすべてに理論を伝えた。そして、彼らが深く探求するにつれて次第に諸理論は事実へと發展し、あらゆる生命を一体化させたので

ある。生物のいずれにも表現されている。すべてを知る英知にたいするへりくだった尊敬の念と愛は彼らの天来の思想となった。子供たち自身の神性の個人的表現をうながすために、人間関係と行動主義が彼らの子供たちに教えられた。

知識にたいするあなたの探求の礎石として役立つことを頼みながら、私はひびきすいて次の若レッスンを捧げるものである。

## 緒言 真理とは何か

政治上の各党派は自己の意見の正しさを主張して互にやがやかく駁合っている。哲學者や科學者は彼らの「まじまじの」説が正しいかどうかについて議論に余念がない。そして互いに相容れない思想の中心（複数）が世界中に勃興しつつあり、そのどれもが自分こそ絶対的な真理の唯一の伝え手であると公言するために、人間は一切何が真理なのかと迷っているのである。

思うに人間が存在してきた限り人間は真理をしつかりと握っていたにちがいない。それに気がつくことなしに真理を求めてきた。

昔ローマ帝國がその榮光の極に達して、その支配力の重圧が多くの人々に感じられていた当時、そのさなかに一人の偉大な導師が虐げられた人々に告げた。「あなたがたは真理を知るのであろう。そして真理はあなたがたに自由を得させるであろう。」そこで救いを求める人々は叫んだ。

「真理ノ、自由になるための真理を与えよ。」人々は真理の意味を聞かされたが理解することは出来なかった。そして現在われわれはそのような言葉の及ぼす、または「真理ノ、真理とは何か？」と強く訴えながら長いあいだ身を震わせた無数の人々の声のこだまを聞いています。そしてこのような探求の声のいずれにたいしても別な応答の声がある。

「我に從え。わが語る言葉こそ真理なり」といふに答た。そこで人は盲目的にそれに從うけれども、生命の目的を殆ど知りもしなければ理解もしてはいないのである。

そこで現代のあなたはたに——多くの物事に ついて深い知識を身につけてこられたあなたがたに私は質問しよう。「真理とは何か？」と。

理想主義的の傾向の人は次のように答えるだろう。「それは實在だ」また非情の科學的の基礎の上に立つて居る人は「事實だ」と答えるだろう。あるいは、真理とは価値の反対なるものかまたは善なるものかと言

う人もあるだろう。始めの二つの回答をした人にしたければ、あなたは活動してきた限りはあなたは正しいと私は申し上げたい。しかし私はあなた自身で織った網であなたを捕え続けるだろう。真理とは善なるものであるというあなたの答えは完全な考え遣いで言い逃れである。

それゆえ、ひとつはほんとうの分析にとりかかることにしよう。真理とは一体何だろうか。あなたはそれを「實在だ」と言った。それで私が實在を定義していただきたいとお頼みすれば、それは實在に存在するものだと言わざるを得なくなるだろう。しかしあなたは實在と非實在とを語っているのだ。あなたは「實在」にたいする一定の基準を持っている。知られているものすべては外見上存在しないと云われるものだろうか。とするとしてそれが知られるようになったのだろうか。

真理とは事實だと言ふ人はどうだろうか。その人は、それは証明され得るものだとおも説明する。そこで次のお尋ねしよう。「誰に、そして何によって、しかもどれくらいのものか」と。証明されたのか」と。ここでその人は一定の区別の基準を持つて居るにちがいない。それはすでに認められている人間の法則が學說などによって証明されねばならぬのだからか。それは万人に証明されねばならぬのか、それとも同胞

の知覚以上に物を見ることの出来る人だけに証明されねばならぬのだからか。証明というものは人間が認める限りにおいて役立つだけであらう。そして吾人にとつての真理は心の実感によるかまたは肉体の表現によるかして本人が体験したものにすぎないのだ。しかし真理は普遍的なものである。それは活動の総計なのである。全宇宙の最小の振動のいずれも真理である。すなわちそれは活動を永続させるがために眞實なのだ。私は私の言葉のすべてを完全に勸道の立つた實際的な基礎に及ぼすつもりである。

世の中の偏狭さの殆どは真理についての誤った考え方のために起るのである。同じ教室の中で少しばかりの知恵によつて自分たちがそれだけ一種の差があることがわかると、人々は真理についての各自の考えを主張して必死になつて争ひ合う。しかし個人的な知能のいすれも理解力の程度でごく僅かな差があるという事實のために、各人にとつての真理はごく僅かな差があるのだ。偏狭さは無知の特徴である。なぜなら、發達した知性ある人は各々分離した活動が相間的に真理であることを示す活動の連続を見る事が出来るからである。そして一つの疑問のあらゆる面が理解されるために本人は誰からも束縛されることはない。このタイプの知性を持つ人は真理全体の中の一つの局面だけを見る人を非難はしない。むしろその人が持つて居る考え方に付随する善とし穴または限界を指すのである。

真理とは活動である。すなわちその各部分が真理であるところの活動全体なのである。もろもろの小さな真理は大きな真理(複數)となる。それで、誤りとして捨てられる一つの小さな真理は過去の歴史に示されるように文明の發達を妨げることになることもあるのだ。人間は真理の意味を理解せず、それゆえに偏狭であるために、これま

に一千年以上の科学的な暗黒の期間があった。それはゆつくりと進歩す  
時をより、高い水準の人間らしい表現にまで高めるために利用され得たか  
もしれない。

「あなたがたは真理を知らう。そして真理はあなたがたを自由に  
するだろう」真理とは万物が真実であるということなのだ。——相関的  
な意味において真実なのであって、しかもこれは他のすべての部分にた  
いして相関的という意味なのである。しかし人間があらゆる活動の「因」  
を認めてそれに十分な考慮を払わぬ限り、決して自由にはなれない。人  
間の努力を結合させて共通の目的を認めてこそ、人間は文明を理解と進  
化の一体化した状態にすることが出来るのである。

真理とはいわば大きな絵、パズル——モザイクのようなものである。  
成熟した人は生命とは遂行されねばならない義務の連続であるというこ  
とに気づくのである。生命につけて歪められた概念(複教)があるから  
といって一人だけが正しいことにはならない。いや、すべては真実なの  
だ。人間の心の中に抱かれる考えが何であっても、差し当りそれは本人  
にとつて真理である。それはちょうど自然のあらゆる活動が創造的であ  
つても相対的であつても真理であるのと同様である。他の真理(複教)  
に関連して建設的に用いるための十分な知識を持たないために人間の考  
えは愚かしく利用されるかもしれないが、だからといってその結果が犯  
罪事実になることにはならない。

それゆえ生命における人間の目的は真実なるものと真実ならざるもの  
とを個人的に判断することではなくて、われわれが「原因と結果」の知  
識と一体化することが出来るように、われわれ自身を自然と同位にする  
ことにあるのである。

## 弛緩

肉体的精神的な安らぎを得るための最も妥当な方法の一つは、肉体を弛  
緩させる能力を発達させることである。心理学、医学、スポーツなどの  
すべては、肉体が緊張してはいない場合に得られる有益な結果(複教)を  
認めている。しかし一般人は意のままに肉体を弛緩させることを困難に  
感じている。

弛緩に関しては誤った考えがあると私は思う。それは不活動の状態だ  
とよく考えられていて、人々は次に言うのである。「ああ、私は  
体を休める時間がな。仕事のために絶えず忙しのだ」もし弛緩がほ  
んとうに理解されれば、右のような人はいわゆる休息の期間より仕事  
中のほうにもっと大きな弛緩があることに気づくだろう。自然の法則は  
目的ある行爲を要求している。もし人が自分の仕事に大きな興味を持つ  
ならば、本人は、用いられるのを常に待つてゐるエネルギーの自由な表  
現にたいする開いた経路になるのである。言いかえれば、何かの特別な  
仕事に夢中になってゐる人は、自由に流出するエネルギーにたいするい  
つもの肉体的抵抗を忘れており、それゆえ自分をその利益にたいして自  
動的に開いてゐるのである。

弛緩は、調和した、抵抗のない活動を再開する過程として利用されね  
ばならない。それはキリストの次の言葉を表わすほんとうの方法である。  
「私の意志ではなく父の意志が行なわれるのだ」

弛緩は不活動ではない。人はきわめて平靜になることはできるが、  
しかしそれはまだ弛緩ではない。昏睡の状態になることはできるし、そ  
れが弛緩だと解釈されるかもしれない。しかしそのような状態は釣合を  
失ふことによつてひき起こされる結果にはかならないのであって、そ  
のために肉細胞の間波数を低下させて細胞を中途半端な昏睡状態にす

るものである。かかる状態は実際には破壊的なるがゆえに避けられねばならない。弛緩は心の真空状態をつくり出すことや活動の中止を意味するのではない。それは宇宙のより大なる活動にたいして肉体の意識が自らを開放する手段であり、それゆえに肉体の如何なる部分にも休止の状態を起してはならないし、起すことは出来ないのである。もし人が自己の内部に起こっているものと精妙な激しい活動に気がなければ、本人は弛緩しているのではなくてただ無関心の状態におちいつていることがはっきり言える筈である。

人は一種の自己催眠によって肉体を静めることは出来るが、これは弛緩ではない。それは肉体の諸要素の自由な活動を破壊するからである。肉体は微小な細胞から成っていて、各細胞には無限に放出できる潜在するエネルギーの生気がある。各細胞内のこの生気すなわち細胞核は肉体内に活気を与えるエネルギーである。しかしこの中心の核を囲む分子(複数)が全体において緊張した状態に保たれているために、それらは内部のエネルギーにたいする障害または抵抗として作用する。この緊張状態が解き放たれると、各細胞を構成しているその外殻の物質は中心のエネルギーにたいして受容的となり、透過力の作用によって高次の振動にさせられるのである。

弛緩は細胞同士の互いにたいする抵抗を除くことによって肉体内の摩擦を減らすのである。たとえば、火山の奥が非常に小さな鉢のなかに入れられるとすれば、奥たちのあいだに避け得られない接触が起るために絶え間のない摩擦が生じるだろう。そして鉢のなかの混雑した状態のために各奥の活動は妨害されるだろう。しかしこの奥たちを大きな池のなかへ放つてやれば、それらは互いに衝突することなくに楽に泳ぎまわらう。奥たちは自分らが持っている潜在するエネルギーを利用する

状態におかれるだろう。肉体内の細胞群もこれと同様に作用するのである。そして細胞の目的の自由な遂行のためにその細胞群を解放するのは肉体の感覚器官の心なのである。

一般の人は自分が自分自身の意見によって如何に完全に待たれて制限されていかに気づいていない。緊張は全く個人的な自我によって引き起こされる状態である。すなわち所有欲、貪欲、恐怖、強欲、我欲などのすべては肉体内に固定した強情な状態を生み出すのだ。きわめて積極的な人は弛緩を最も困難なことだと感じるが、それは弛緩が開放と非抵抗から成っているからである。それは常に保たれねばならない自然の状態であるが、利己的な興味あることのために蔽中している人はその状態を保つことはできない。

最初、人間は満足と弛緩の状態で生きていた。人間は、女の物々しきわが物々の区別を知らなかったからである。人間は、父りによって完全に導かれていた。そして人間の意識的な想念のいずれもその純粋な幻想の状態を自由に完全に遂行された。ところが人間が緊張するようになつたのはまさに自由な活動にたいする抵抗をつくり上げたときであった。その結果は苦痛、病氣、死などである。

弛緩の状態になると、招き寄せようとするすべての人にとって自由は存在であるところの無限の意識のエネルギーにたいして、弛緩した本人は柔軟になり受容的になる。生命とエネルギーは無制限なものであるけれども、われわれは自分が受け入れようとするだけの生命とエネルギーを受け入れることができるだけなのである。

金星の人々はこの法則のもとに生きているので、われわれが地球上で堪えねばならないようなさまざまな不愉快な状態に直面することは無い。人間は生命の充満を表現することはできるが、もしそれを自分を通

じて表現させたいのなら、宇宙のエネルギーにたいして非抵抗の状態に  
ならなければならぬ。人間は個人の自覚を高揚することによって活動  
のほんとうの針路を失ってしまっている。あらゆる物事の成就は個人的  
な努力によって達成されると思ひ込む習慣を身につけてしまったのであ  
る。努力ということにこだわらなければ全く自然の有様で起つて来るこ  
とまでの状態を力づくで行なおうとすることによって自分を不必要に  
疲れさせるのだ。個人的な優越的態度のために多くのエネルギーが浪費  
されている。非個人的な非抵抗がエネルギーの自由な流出を起こせる  
ということ、平靜な場合が摩擦の場合よりももっと激しい活動が行なわ  
れるということなどを人間が理解するのはむづかしいのである。人間は  
全く低次の粗雑な振動に氣づくようになってしまったために、精妙なも  
つと靜かな平安な状態の活動に氣づくことはできない。非抵抗は愛宥的  
な態度で生きる人は眞實な幸福の道を見出してゐる。本人は疲れ、苦痛、  
失望などを知らぬからである。

肉体的な活動を行なう際は奮闘しなければならぬとか、著しい物事  
を達成するためには個人的な物事の努力の跡を見せねばならぬといつ  
た考え方は誤った信念なのである。最高の達成という高所に到達する人  
とは、自己の諸活動のすべてを靜穩な安らかな状態にとどめて、自分は  
英雄の扇動者または技藝者などではなくてその英雄を現象の世界に流出  
せしめるための、物々にすぎないという事実を認める人である。活動に  
たいして感受者が清浄化されればされるほどその活動は大きくなるので  
ある。

われわれの生活により多くのエネルギーと知恵をもたらすものは、個  
人的な意志の遂行ではなくて個人を非個人的な意志のほうへ解放するこ  
とである。われわれは、利己主義なる障壁をとり除きさえすればよい。

そうすれば理解の潮がわれわれ自身に流れ込んで来て、やがてわれわれ  
はその潮の活動のなかに浸るようになるのである。

## 宇宙の言語

近年になってこの文明の歴史にかつてないほどの友好精神にたいする  
大きな氣運が生じてきた。ラジオ、テレビなどの發明は世界を共通の関  
係に結びつけてゐる。異なる国々の人々のあいだの意志交換が楽になる  
ように一つの共通の言語を作る可能性について各國の學者間に多くの討  
論がなされてきた。

しかし氣づいてゐる人は殆どいないけれどもそこには一つの世界共通  
語が存在してゐるのである。それは人間の表現ばかりでなくあらゆる生  
きものの表現をも含んだ言語であり、またきわめて簡單であるために新  
しく生まれたいふ妨にさえも理解できる言語である。

われわれは人間同志のあいだに一つの世界共通語の理想を描いてきた。  
これはわれわれが人間の音声を理解することができるといふことに氣づ  
いていて、人間の音声なるものはその人の心を通過する想念をわれわれ  
のために説明してくれるためのものと考ふる習慣を急速させたからであ  
る。しかしわれわれの言語單一化の努力においてわれわれは人間の言葉  
以外の何物をも含んではいない。一体なぜこゝろならなくては行けないの  
だろうか。自然に此自体の言語よりもかくも異なつた言語の言語を  
作り上げる音があるのだろうか。人類の異なる種族がこゝろの音声  
や音の結合でもって話してゐるように、この世の生きもののすべてが同  
じようにやつてゐるのである。しかしわれわれはそれらの生きものの言  
語を理解しようとはしない。人間は自己を生命の一面にだけ閉ぢ込んで  
しまい、宇宙の広大にたいしてドアを閉ぢしてしまつてゐる。これ

は外界の事物から来る印象を受けるところの肉体の感覚器官のみを人間が認めているという事実によるものである。人間は肉体の聴覚器官に刺激を与えるだけの粗雑な音響のみを聴きとろうとする。そこで全般的な宇宙の言語を解読する能力を失っているのである。この宇宙の言語とは何だろうか。それは意識的な感覚なのである。すなわちあらゆる形あるものを通じて話している。それゆえに、すべてを不可分な一体に結びつけている声なのである。宇宙にはこの意識的な感覚としての声によって人間に話しかけることのできないものは存在しないし、またその言語を理解できないものは何ひとつとして存在しない。それは最大の物を通じて話すと同じくらい明瞭に最小の物を通じて話している。

あなたは宇宙のあらゆるものと関係がある。意識という言葉は万物によつて語られているので、あなたが絶えずこの事実を気づいているならば、あなたにとつてあらゆる生きものを理解できる時が来るのである。樹木に茂る葉、小鳥のさえずり、カエルの鳴き声、蜜蜂の唝り音、すべてがあなたに語りかけるのであり、あなたは各個別化した経路を通じて現われている生命を理解するだろう。最も小さな音響のいずれも人間の声と異ならない音響になるだろう。そしてあなたはすべての生きものの意識を感じるだろう。

たとえは、人はなぜ音楽に感銘を受けるのだろうか。それは人間が話すような言葉を話しはしないが、やはり或るメロディーは大きな喜びの感情を生み出し、或るメロディーは悲しみの感情を起こせたりする。また別のメロディーは人を意気揚々たる状態にもする。それは音楽の大家に影響を与えるのと全く同様、その調和の科学を全然研究したことのない人にも影響を与える。音楽は世界共通語だ。それは、基本的な感覚を通じて解読されるからである。

なぜ人間は着になるときわめて喜ばしくなり、生気発散としてくるのだろうか。また年の暮れとともにホッとするような感じが湧き起ってくるのはなぜだろうか。自然は宇宙の言語を話しているために、人間はそれに気づいていよつかりよしがその言語を理解し、それによって影響を受けているのである。

或る普遍的な言語が存在するということが事実でないならば、動物を人間の命令通りに行動させるように訓練することがどうしてできるだろうか。ノミのような小さな虫でさえも完全に演技させるように馴らすことはできるのである。これら動物の行爲を導くものはたしかに人間の声またはフランス語、英語、スペイン語などで話される言語ではなく、それは如何なる可聴的な言葉以上に明瞭に話している意識的な感覚という言葉なのである。

宇宙の言語は音響、光、想念の波動である。それはただ一つの声、すなわち大きな感覚の声なのである。それは雷鳴のすさまじい轟きとなつて話し、またわれわれの最も深い休息のなかにも話している。

人間の最大の力はこの宇宙の言語を認識することのなかにひそんでいる。なぜなら、最小の象子のいずれもが人間の話す言語を理解することができるといふことに人間が気づくとき、人間は深い確信をもって非個人的に命令することになり、下等な生きものすべては人間に従うことになるからである。人間は自ら大きな達成の高所にまで昇るだろう。彼は最大のものと最小のものを知ることになり、それらを統一された行動に導くことができるからだ。

意識の低次の声である音響という媒介を通じて現われる言語について私は話ってきたが、ここで想念について考えてみよう。ここでわれわれは一步高い段を昇ったことになる。というのは、この伝達の形式を通じて

てわれわれは時間と空間を排除してきたからである。想念という媒介を通じてわれわれは数千里彼方の人に話しかけることもできるし、しかもこの連絡は殆ど瞬時になされるのだ。この意思伝達の手段によってわれわれは相手の肉体が睡眠状態にあっても話しかけることができる。意識的な想念というものは時間、空間、または諸条件によって妨げられることなく働くところの使者なのである。

かかる伝達の形式はアテになるものではなくウソだと言われてきた。想念が宇宙的な源泉から放射されたにせよ個人的な経路を通じて放射されたにせよ、われわれは意識的な想念の音によって絶えず導かれてゐるのである。意識の音そのものにはかならない個人の直感力なるものに或る程度気づいていない人はない。

元素の支配においていわゆる奇蹟を演じた偉大な人々は、もし彼らが感覚の言語を理解せず、あらゆる生きものと同じ知覚力を有してゐるといふことに気づかなかつたらば、その奇蹟をなしとげることはできなかつたことだろう。人間の直感力、動物の本能、物質の相手の親和力や吸引力などのすべてが宇宙の言語の証である。全太陽系内の最小の振動のいずれも意識という音によって送られてゐる言葉であつて、人間の肉体の感覚器官がエネルギーの最小の運動にさえも気づくようになる場所にならしてその感覚器官を警戒させるならば、本人は自分を宇宙の知恵の殿堂から分離させてゐる神祕のヴェールを脱除くことになるのである。

## 化学的な宇宙

この世には宇宙の言語を話さぬものはなく、また、われわれが観察する物の振動に注意を払うならば宇宙の秘密を洩らすぬものはない。われ

われが宇宙の理解を得ることができるのはこの小さな世界を通じてこそできるであつて、かかる知識が得られるのは、大地、空気、その他地上のさまざまな形あるものを構成してゐる諸元素に關して不断の探求を続けることによるのである。

宇宙は常に活動し変化してゐて、科学的な問題について一般の素人が如何に興味を持たなくても、一瞬一瞬自己の周囲に行なはれてゐるその絶え間のない活動を意識してゐない人はこの世にいない。草花や樹木の生長、降雨や降雪、液体の蒸発、熱の影響下にある金属の膨脹及び低温下の收縮、植物性物質の醱酵、無機物の酸化など、形あるものの絶えずなる構成と崩壊に最も観察力のない人でさえも注意を払わざるを得ないのである。もしわれわれが燃える丸太から立ち昇るガス類や、火が燃えつきたあとで残つた灰などのすべてを注意深く集めることが出来たらば、その変形の過程において失われた物は何もないことに気づくだろう。完全な破壊というものは存在しないのだ。宗教家はこの変化する現象のすべてを多少とも無関心に眺めて、それを神の業々と名付け、そのかわべだけで価値を認めるけれども、科学者は外観を起して飛躍し、全体として生命は不断の化学作用の結果であること、及びその周囲の知識に於ては化学こそ生と死、創造と再創造、歎息と苦痛などにたいして勝利を握つてゐるといふ興味ある哲學的事実を明らかにした。宇宙は巨大な科学研究所以外の何物でもなく、その内部では現象の無數の形態を造り出すために諸元素が絶えず結合しつゝある。水、火、土、空気及び大気圈上の想像もつかないような精妙なエーテルなどはすべて化学的な合成物である。光と暗黒、愛情と恐怖などもすべて化学的な反応なのである。人間の想念でさえも化学的な合成物の性質をもつてゐる。われわれは人間の肉体が無數の化学物質で構成されてゐることをよく知つてゐる。

またわれわれは一つの意識的な理想が充滿しない限り肉体が活動しないことも知っている。人間が無意識な状態にあればその肉体は活動しない。肉体の各器官はその器官を構成している細胞間に起る微細な化学反応によって作用し続けるということも事實であるが、それさえも際限なく続きはしない。如何なる肉体の運動といえどもその肉体を構成している諸元素の化学反応なくして起ることはない。エネルギーを生み出すために化学反応を必要とするからである。潜在する力は物質の各要素のなかの父母化学物質として存在するが、あらゆる形あるものの活動の奉仕に就いて必要な運動のエネルギーとして知られるものを生み出すのはこれらの諸元素の反応なのである。異なる化学物質だけが化学反応を生み出すのであって、概念が肉体の活動に就いて必要であるという事実は、概念自体が化学物質であることを意味することになる。たとえば誰かが心のおだやかな状態にある場合、本人は食物を食べることができ、その肉体はいくつかの対抗的な反応もなくミネラルを消化するが、上等な食事をする際にその肉体へ憎悪または恐怖などの激しく集中された概念をとり入れるならば、化学物質の反応はただちに医師がまたはかばかりの量の重炭酸ソーダを必要とするだろう。恐怖、憎悪、利己主義、羨望などはそれが肉体内の化学物質と混ざるとき激しい反応を生み出す要素となるのである。化学的な燃焼以外の何物でもない発作的な怒りは寧ろは肉体を破壊し、苦痛として知られるものを生み出すのである。もし科学者がその研究室内で或る元素類を親和の法則に従って化合させて調和した結果を生じさせるならば、彼は殺られるけれども、もし誤った化学物質を混ぜ合わせると自分自身を粉々にするかもしれない。火のほかに入れられた丸太がその目的を果たしてその元素類は変化しても破壊されないのと同様に、如何なる形あるものの元の元素類は永遠に存在す

るのである。水の存在していた場所が乾くかもしれないが、その液体を構成していた水素と酸素はいつまでも存在し続けて、いつても物体に立ち返るかもしれない。人間の「人柄」をつくり出すのは化学物質の動・及動なのであって、そのためにこそ「人柄」は常に変化していなければならないのだが、元の各元素の総計である靈魂は同じままで、すなわち破壊されることなく永遠に生き続けるのである。

### 古代の知恵か現代の進歩か

人間の心には過去を讃えることによって大きな満足を味わうらしい奇妙な特性がある。東洋人は祖先を崇拝することにこの特性をあらわしている。西洋人はすでになくなつてしまつた偉大なる懐しんで常に英雄崇拜を続けてきた。各国の政老たちは安樂椅子にもたれて「古きよき時代」を回想する。たぶんそれは過去の實際の現実を時々がやわらげて、自らつくり出したごまごまのイメージの多様な光景を感しているからだろう。また、いずれの方面に野望があつてもとにかく遠方の野望が一そう青々と見えるのだらう。しかしとにかく過去を求めて生きていく人が非常に多いために、われわれは現代において「現在」なるものかどんなに役立つというかを考えさせられるのである。

多くの宗教団体、特に心靈研究団体などのあいだで、われわれは古代人の偉大な知恵について「いぶん聞かされてゐる。」「あなたはずばらしい活動状態にまで自分を高めたいと思えば、古代にかえつて古代人の教本を研究しなければならぬ」と言う。これは少しも歪められて聞かせるのではあるまいか。進化するために昔にかえらねばならぬとは、一体なぜか。進化とは破壊であり生長であるのだ。樹木は生長してゆくうちに元の根には戻らうか。そんなことにわれわれはわれわれの果実を決

して味わうことはできないだろう。

誰でも自分の手のなかに持っている物に満足する人はないだろうと私は思う。ゆえに手を伸ばして何か新しい物を掴もうとするのは当然のことであつて、それは前進というべきで後退ではない。なぜ静まりかえつた過去をせんたくするのだろうか。過去はその役割を果たしたのだ。過去はわれわれを現代にもたらしてくれたのだ。もうソツとしておこなうてはなしか。過去のものもその業績は現在のわれわれに役立つことはない。そして過去の諸法則に固着する限り、われわれはそれをいまも適用しつゝある。なぜなら全宇宙には活動のただ一つの原理が存在するからである。それは無数のさまざまの現象のなかに応用されるが、それ自体は決して変わることはない。われわれがその原理を証明し得る唯一の方法は生み出された結果によるのであつて、たしかにわれわれは古代人がやったよりもはるかに大きなスケールで結果を生み出しつゝあるのである。古代においては誰かが人類に役立つ物を發明したならば、その人は神とみなされ、その南緯は奇蹟と考えられた。今日われわれは殆ど毎日のように新發明をしてゐるけれども、それを何とも思ひはしない。

「われわれはまだ、古代の知恵の偉大さすべてを発見してゐない」とも言はれてゐる。それもほんとうかも知れないが、敢えて言うけれども、もし数人の古代人が突然現代の大都市へ連れてこられたとすれば、彼らは現代人の奇蹟的な業績に呆気にとられるだろう。彼らはたぶん自分たちが特別に進歩した人のために準備されてゐる。どこかの「世界」へ来たのだと思ふだろう。そしてしばらくのあいだそこに住んで自分たちが現代人の理解力に合わせてから、自分たちが実は選ばれた人間ではないと、誤つてこの驚くべき場所へ迷ひ込んだにちがいないと考えるだろう。

一体なぜわれわれは現代の生活を古代の哲学に基礎づけねばならぬ

と云うのか。牛車に立ち送ることを棄しむ必要があるだろうか。世界の人口の大部分は牛車の輸送に頼つては餓死するだろうと私は思う。いわゆる心靈研究家のなかには、古代の神話と儀式といふのろい棄物で運ばれて来る貪弱な精神的な糧のために餓えてゐる者がある。われわれはこれまでに何ほど急速に進行しつゝあつて、現代の進歩の状態に這れをとつてはならないように強いられてゐる。われわれの心の振がりは機械の発達と一致してそれを支持しなければならぬのである。あまりに過去に執着してゐる人々は、なぜそんなに突進するのか、そしてどこへ行くといふのかと尋ねる。私は次のように答えよう。われわれは目的のない突進などする必要はなく、ただ急速に動く生活上の出来事に這れをとつてはならないのだ。

知恵の欠乏のために現代の文明は破壊に近づいてゐると言ふ人々がいる。たぶんそうかも知れない。しかし過去の過去にたつて古代人の知恵を研究することがわれわれに何ほどの利益をもたらさう。古代の名文明は古代人に与えられた知恵の言葉に注意を払わなかつたといわれれば言ふことが出来るだろう。そしてそれは真実なのである。レムリア、アトランティス、エジプト、ローマなどすべては偉大な文明であつたが、みな過ぎ去つてしまつた。今は新しい諸問題をかかえた新しい時代なのであつて、宇宙の知恵と知識の貯蔵庫にたいするトアーは各人がそこへ入るためになく開放されてゐるのである。われわれの現在の問題はわれわれのバランスを保つことになるのだ。結果の世界に生きて豫図を追求してゐるのである。

ヒンドゥー人のあいだには、夜中に露管火に水を積み重ねれば重ねるほど明るさは増すけれども、その周囲の暗闇も深くなるという意味のことわざがある。この露管火の明るさに似たわれわれの現代の知恵はかぎり

なものがある。それゆゑ、われわれが嘗ては嘗て、人間がまだ解説してない「まぼろしの可能性」に關する知覚の範圍は拡がってくる。われわれが知識を得れば得るほど、嘗てははなれぬことが如何に多くあるかということを知るのである。われわれが知覚する世界はきわめて広大になつてきたので、周圍の暗闇も「ソツ」とするほどのものになつてゐるけれども、立証されない物事についてかかる大きな知覚力をわれわれが持つてゐるといふ事實そのものは、その物事がいつか立証されるということに意味する。われわれは空間を通じて他の諸衛星へ進行してゐる宇宙機に氣づいてゐる。そしてちやうどジェット機や航空機が現在一般的に輸送手段となつてゐるように、それが實現するようになる日は遠くはない。

われわれは昔の錬金術師について多くの事柄を聞いてゐる。たとえば下等な金屬を黄金に変えたといわれる。パラセルサスなどを知つてゐる。「奇跡だ」と人々は言う。現代の科學者は他の物質から黄金を作り出すことが出来るが、その方法にあまり費用がかかりすぎて實用化には至らない。

古代の僧侶たちは當時の唯一の科學者であつた。彼らがなしとげた物は何でも人を支配するための利己的な目的のために用いられた。香料として用ゐるならば人を恍惚状態におとしめるような化学物質を彼らは作ることができたと言われている。しかしこんな事を行つて實際にどんな利益があるだろうか。たしかに僧侶にとつてはかなりの利益があつたことだろう。というのは、被術者がかかる魔力にかけられるならば僧侶は彼らの財産のすべてをいとも容易にふんだくることができたからだ。そしてその演技の舞は最も都合のよい神々のドラーのところに設けられていたのである。

今日、科學者は彼らの知識を實際的に応用してゐる。彼らは伸びゆく技術上の業績の必要に應じようために新しい金屬を作り出してあり、進化という重層的の回転を促進するために自然の力を動力に利用してゐる。宗教家が無神論者と呼んだこの科學者たちは、あの、一つの原理が万物を支配してゐることを認めることによつて諸要素の支配者になりつつある。

われわれはこの地球の人類間に友好の時代を期待してゐる。そして眞の活動の諸法則を発見してこの達成の方向に長足の進歩をどけてゐるのは科學者なのである。科學は相互扶助の法則のもとに活動してゐるけれども、宗教は分裂の法則のもとに活動してゐる。科學上の探求の仕事によつて人間は宇宙には利己主義、頑迷、狂信または偏狹などの余地はないといつた大なる知覚に達するのである。實際に創造物を探求する人はその無限の活動に没頭するので区別ということをしなくなる。彼らは人間の皮膚の色が白かろうか黒かろうか兄弟として万人を尊敬し、それだけの理解の能力に應じて信すべき権利を万人に与えるのである。彼らは聖や教義や独断説などに縛られることはなく、常に新しい啓示にたいして開放的である。彼らは人体を自己自身にさへも知識の分野における彼らの探求の道を妨げることを許さない。なぜなら彼らは自己の肉體を全般的に他の探求者と人類の利益のために喜んで捨てるからである。

科學はこの数年間急速に進歩してきた。現在、優秀な器材や国際地球観測年の研究、及び人工衛星などの助けをかりて、科學者は益々深く、因の領域を探求することが可能である。彼らは「自然の創造的教學」を理解し応用し始めてゐる。すなわち、E. プラス1は3という教學である。探求の分野が拡がるにつれて、古い理論はもっと實際的

な知識と置き換えられつつあるのだ。

われわれが言い得るのは、科学的な探求によってこそ世界の人は、宇宙の奥をより親しく観測することができるといふことである。

私がここでいう科学者というのは、原因から結果へと探求する理学的な科学者なのであって、結果の世界以上を見ようとしぬ独断的な正統派のことではない。

「自然の創造的数学」において1プラス1が3になるという理由をここで説明しておくのが適當であろう。陽と陰とが合体すると一つの現象が生ずる。電気において光となり、男と女とにおいて子孫が生まれるように、自然全体がそうなのである。現象化された結果を理解するために、それを生ぜしめた諸条件が理解されねばならない。

## 過去の文明

私は最近レムリアとトリテリアン種族に関する記録を読みおとしたので、読者がどのような興味をもたれるか知らぬが、とにかくそれについてお伝えすることにしよう。他の諸遊星から来た私の友人たちが私に語ったところによると、現在彼らの遊星に住んでいる人々の多くはかつて地球上に住んだことがあるといふ。

よくアカシツク・レコードと言われる宇宙の記憶の書の中には、無数の年月を通じて行なわれてきた活動の物語が収められている。絶えず活動する意識の指はあらゆる運動と現象の明白な破壊できない型を宇宙の基本的な実体の上に記している。石碑や羊皮紙や紙などに書かれた人類の歴史は存在物の限りある記録にすぎず、そのため未来の世代の知識にとって容易に失われるのであるが、宇宙の記録は永遠の建造物なのであって、その記録を読むことのできる人は生命の歴史における

頁を失うことはないのである。

万人に開かれるだろうと聖句がわれわれに語っているその「記憶の書」から、われわれは太平洋の暗黒の海底に沈んだあの神祕の大陸レムリアの物語を読んでいる。

レムリアは太平洋の諸島——ハワイ、イースター諸島、ニュージーランド、フィリピン、その他の小さな群島の殆どを含む広大な大陸であった。これらの諸島はかつて現在沈下している大陸の最高の山々の峰を成り、すくなく、原因と結果の知識を有していた。彼らは自我のためではなく、全体のために生き、万物を宇宙の英知の表現とみなした。各人は自分自身が宇宙の力の召し使ひであることを知っていた。彼らは一個人が他人よりもすぐれているとか、或る仕事が他の仕事よりも重要であるとかいった考えをもつことなしに、穏やかな態度で自己の義務を遂行した。彼らの間に嫉妬や貪欲は存在しなかった。すなわちレムリア大陸は不和を知らず、平等のゆきわたった幸福な一家族の家であったのである。

レムリア人は褐色の皮膚を持つ種で、その平均身長は約五フィート三インチであったが、ときには巨人も現れた。現代のアラスカ人は如何なる民族よりもレムリア人に似ている。

彼らはきわめて勤勉で活動的な人種であり、高度の感受性と直感力とを持っていた。彼らは精神感応の方法によって互いに会話を交わることができたし、彼らの活動は主として自己の実体のより大きな英知によって導かれたので、彼らは驚くべき業績をあげることができた。彼らは宇宙の科学において高度に進歩していた。そして活動の諸法則に関する彼らの理解力によって、地球の諸元素にたいする素晴らしい支配力を持つ。

つていたのである。

世間の文物は彼らのつくれた感念によって整理された。そして彼らの元素のすべてを利用した。

彼らの建築様式と芸術作品は構成と美において素晴らしいものであった。彼らの寺院は禮拜所というよりもむしろ彼らが日常の活動の責任を担った神の宮にたいてい持たされた美の記念碑であった。これはこの古の民族が中へ入って礼拝すべき寺院というものは世襲としなかつたためである。すなわち、彼らは自己の内面や地上の生きものすべての内面に充てる。念實を認めていたのである。当初彼らの理想主義は一向の方向に凝られていたとされた神の徳であった。そしてこの理想主義のために彼ら何現代人に知られていない方(複製)を与えられた。レムリア人は自然の動植物を適用したり採集したりはしなかつた。そして彼らがその帝國を建設したあいたは、それは地上にありうる實際の天國であつた。

しかし、争突とありはる文明と同様に、彼らはやがて没落したのである。徳性は貧弱と弱くまゝのなかに失われ、その末期は現代の文明と異ならなかつた。ついに自然が侵襲してその大陸は太平洋の海に沈んだのである。

レムリアの黄金時代はほぼ三千年続いている。この期間中にレムリア人はエジプト及びアジア各島のすべてと接触したが、レムリアが世界の他の国々から来た部族の民族によって侵略されたのはその黄金時代が過ぎ去つてからであつた。当時、現在カリシヤ、ローマとして知られている地域から来た人々がいて、レムリアに定着したのである。この人々は軽薄な種族だったが、レムリア人の信用を得て互いに結婚し合ひ、次第にこの幸福な民族の清純な思想を汚していった。この異分子はゆっくりと

レムリアの支配権を握つたのである。彼らは無情な専断しい支配者で、富と権力を求めて貪欲であつた。彼らは偏好を示し始め、レムリア人の心に不平等の思想を染み込ませ始めたのである。その民族がかつては活動の愛のために互いに奉仕し合つた土地で、今や彼らは少数者を富ませ、それに権力を与えることを強いられた。彼らは謀反と利己主義と貪欲の意味を知つた。——これらはそれまで決して彼らに存しなかつたものがある。彼らは支配者の範を見習うことを知り、全體のかわりに自己のために働くことを知つた。彼らは自己の創造者の導きをたいて自己を固め、肉體の表現の方向に転じたのである。

これは数百年続いたが、ついに自然の力は彼らのアンバランスな状態にたいして代償を要求した——苦痛という代償である。もしこのアンバランスな状態が長くならば未来に破壊が起るという警告を与えられたけれども、彼らはそれを心に留めなかつた。そこで自然は彼らに忠告したのである。大地は彼らの足元で揺れ始めた。津波は沿岸を洗い流し、最後に連続的な地震が全レムリアを襲つた。約七ヶ月のあいだこの地震は続いて次第に大陸は沈み始めた。海水が押し寄せ、かつての天國の如き王国を覆ひ、かくて一つの文明が失われたのである。

この地震と大陸の沈下は自然の諸原因によるものであつた。地表の变化は一定の期間ごとに来るものだが、レムリアの人々はあまりに現象の世界にとらわれてしまつたために、彼らは自然から与えられる警告に注意を払わなかつたのである。もし彼らがその徴候に気づいていたら、安全な地帯へ移動することができたであろう。

如何なる民族のバイブルのなかに、一つの創造の物語と人間が完全な状態で生きたという一つのエデンに関する示唆がある。しかしそれは結局示唆にすぎず、人類はそれを現代の状態における人間の進化に何ら

の影響をもたない一篇の美しい神話だとして考えなかつた。しかし意識という年代記のなかには神の如き人々とそのエデン的な国を持った或る種族に関する事実が述べられている。

この文明人はトリテリア民族と呼ばれた。そしてこの民族の記憶からギリシヤ初期のトリトン神なるものが生じたのである。このギリシヤの神は半人半象として描かれたが、それはトリテリア族を「波の人々」と語っている宇宙の記録と一致するものである。もちろん彼らは半人半象ではなくて水と大地の両方の支配者であった。

理想主義者はときとして完全な人間なるものを霊的实体として描き、天上の栄光の世界にのみ住んでいて、自然の法則に打ち勝つ力を持っていろと考へてきた。しかし、われわれはトリテリア族が因体をもって地上に生きた人間で、自然の法則に完全に協力した人々であることがわかるのである。

彼らは大きな体格の人々で、その皮膚はわれわれの銅またはサビ色にたとえてよいだろう。それはおそらく当時地上に降りそそいだ激烈な太陽光線によってそのような色になったものと思われる。

この偉大な民族は宇宙人であった。そして彼らが地球上の体験を得なからずしていたあいだ、彼らは自身を「全体」から分離せなかつた。彼らは現代人がやうに地球の諸元素を研究したが、しかし元素類が現象化している原因を理解していた。彼らは物質の知識を得るためにこの太陽系へ派遣されて来たのであって、「因の英知」の指導のもとにこれをはじき逐げたのである。彼らにとってこれをなすのは容易なことであつた。あらゆる活動を支配する自然の法則を彼らは知っていたからであり、また應用することなしに自らの知識を應用できるほどに賢明であつたからである。親和の法則はこの人々に何らの神聖感をも起

こさせなかつた。そして諸元素は完全に彼らの命令に従つたのである。地上はエデン的な美の完全な表現であつた。

トリテリア人は現在行なわれているような宗教を持たなかつた。——彼らは科学者の民族であつた。彼らは想像や神話でなく事実に基づいて活動したからである。彼らは神々を持たず、全英知を持つ力を認めて自身をその表現とみなした。また彼らは原因と結果とを理解していたために、肉体の心が創造者を導くような誤ちをおかすことはしなかつた。自分たちと宇宙の意識とのあいだに分裂感を起すこともなかつた。彼らは自由と成統の確信とをもって活動したのである。それゆゑ生活は平安で調和に満ちていた。彼らは神々や悪魔と争はれることはなかつた。彼らの知覚の状態だけが混和された活動の状態であつたからである。創造における二元性の必要を認めなければ、その力を善と悪とに分けることはしなかつた。

生命力にたいする摩擦や抵抗がなかつたために彼らの肉体は常に若さを保ち、われわれが知つていろよくな死は存在しなかつた。

地球のこの學士たちのあいだには貪欲や利己主義はなかつた（今日の言葉で言えば、彼らはあらゆる部門において彼らの學士ユニヴァーシティーの學位を得ていたと言へるだろう）。彼らは宇宙の物質は制限がなく、破壊もできぬこと、それゆゑにあらゆる必要を充たすには常に十分であることを知つていた。誰も物質的な富の蓄積にふけるものはなかつた。

現在、トリテリア人の子孫はいない。というわけは、彼らはこの地球上で一定の期間奉仕したのち、他の太陽系へ宇宙船で運ばれたからである。これは聖書時代に先立って地上に住んだ種族である。人類の進歩はレムリア人の出現までは起らなかつたのだ。トリテリア人は純潔な状態で地球を去つて行き、より大いなる奉仕に近づいていったが、彼らに

従つた着陸後のすべては現存もなわ宇宙の生得権を取り返すために生き  
て努力している。トリテリア人は直感力と従順さによって宇宙を探索  
したけれども、他の種族は苦痛と結果の観察によって自己の知覚力を得  
ることを選んできた。そして肉体系同としての概念の束縛のなかに生ま  
ていふのである。

われわれがもう一度あらゆる生命の一体性に目覚めるならば、われわ  
れの自然の天性への復帰はトリテリア人のそれと同様に栄光あるものと  
なるだろう。

宇宙人が私に語ったところによると、地球上の諸文明に関する記録が  
彼らの意識に保存してあるということ、またレムリアとトリテリアに  
ついての以上の説明は正しいということであった。(註。以下又々)

### 練習日誌

毎日わざと二つてくるあなたの想念を検査し続けろには簡単な方法が  
ある。先ず手帖を用意して各頁をタテに二分し、左側には、非利己的な  
こと、理解を得たこと、あらゆる生命が宇宙的に一体であることを自分  
に思い出させるようなことなどに肉する想念を書きとめ、右側には  
利己的なこと、不安、不満足、他人にたいする非難、結果だけを見て  
愛憎を見ないことなどに肉する想念を書き記すのである。かくして、  
絶えず自分の精神状態の観察者となり、一日の終りに総討を出す。これ  
が或る期間続くと、心と肉体に混乱をひき起こしていた自分の古い習慣  
的想念がいつのまにか消えていることがわかるのである。

(下段より)

まず、あなたは現在の自我の師としてあなたの、真実の自我を用いよ  
うとしています。以上の方法を用いるならば、生命のあらゆる分野に學  
習の終りはありません。

### 宇宙哲学の読み方

C・A・ハニー

二の書物から最上の結果を得るためには、先ず鉛筆と紙を用意して下  
さい。あなたが各頁、各行を読むにつれて、あなたが受ける印象のすべ  
てを片っぱしから書き留めるのです。一時にあまり多くを読んではいけ  
ません。最上の結果を得るには、一頁を読んでそれから先へ進まないで  
自分の印象をすべて書き留めることです。

二のようにして書物の全部を読み終ったならば、もう一度読み返して  
下さい。すると今度はあなたの印象が変化していることに気づくでしょう。  
しかしそれらの印象は一回目のものよりもその印象と混ざり合います。  
二のことは自己発展の過程なのです。続いて書物を何度も読み返して下  
さい。そして読むたびにあなたの印象をノートにとるのです。あなたは  
読むたびに新しい印象を受けましょう。

二のことはあなたが二の書を読みにつれてますます高く進歩しつつあ  
ることを示しています。これはあなたがあなた自身の師になります。絶え  
ずノートをとることを忘れてはいけません。ときどきその感想を読んで、  
それらの感想がどんなふう互いに混ざり合っているかを調べてみて下  
さい。そしてその書物からあなたがこれ以上新しい印象を受けないよう  
になるまでこれを続けて下さい。

そうするうちに、あなたは自分の書物を書いてしまったことになりま  
す。あなたが自身の発達を続けるためには、あなたが読み進むにつれてノ  
ートをとっていったのと同じ方法をくり返して下さい。こうしてあなた  
はこれ以上に何らの援助なくして、生きる限り発達を続けることになり  
(上段へ続く)

